

～唐津城石垣再築整備事業に伴う文化財調査～

「唐津城跡」本丸文化財調査 現地説明会 平成23年8月28日(日)

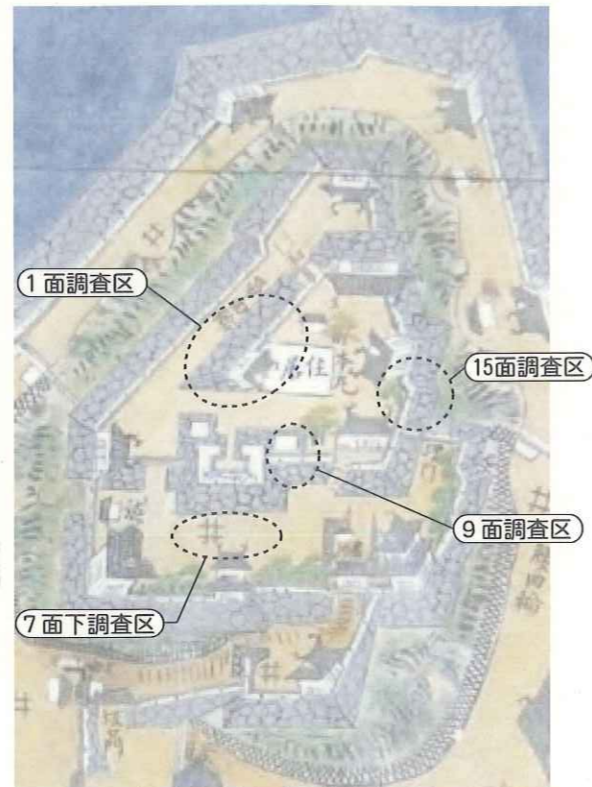
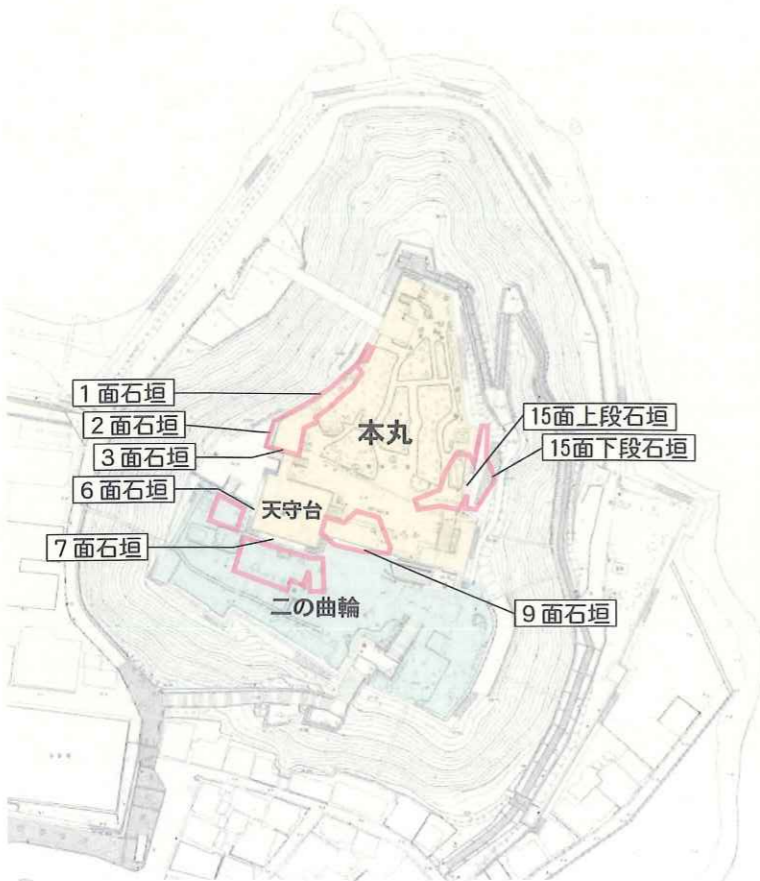
★文化財調査成果のポイント★

- ①石垣の裏から古い石垣を発見  
9面石垣の古い石垣(旧石垣)を発見しました。旧石垣と9面石垣の様子は異なっています。9面石垣が17世紀前葉(唐津藩初代寺沢氏の頃)に築かれたもので、旧石垣が唐津城初期段階の石垣と考えられます。
- ②本丸形状を改変  
古い石垣を覆うように9面石垣や天守台石垣が築かれていることから、唐津城築城当初の本丸形状が現在と異なっていたと考えられます。これは、謎が多い唐津城築城の様子を知るための重要な手掛かりとなりました。

○調査に至る経緯○

唐津城の石垣は築城されてから400年が経過し、石材の劣化や石垣の孕みなどが目立つようになってきました。平成17年には、石垣修復の専門家から崩落の危険性が改めて指摘され、唐津市では約3年をかけて総合的な調査を実施することとなりました。またそれと並行して専門委員会を立ち上げ、土木や石垣修復など様々な視点から、修復の方向性や方法についての検討を重ねてきました。

その成果を受けて、平成20年度から石垣再築整備事業が始まりました。まず15面調査区(15面上段・下段石垣とその掘削予定範囲)を対象に平成20年10月から事前の発掘調査を、平成21年3月から6月まで15面上段・下段石垣の解体を行い、今後の石垣修復に必要な仮設作業道を設置しました。平成21年10月からは1面調査区(1～3面石垣とその掘削予定範囲)の発掘調査に着手し、平成22年4月から平成23年6月まで石垣の解体工事を行っています。さらに平成22年5月から9面調査区(9面石垣とその掘削予定範囲)で発掘調査を行い、引き続き平成22年11月から平成23年7月まで石垣の解体工事を行っています。天守台下(6面下・7面下調査区)では、平成22年12月から発掘調査に着手しています。



唐津城絵図(江戸時代中期)唐津城天守閣に展示中

○唐津城の概要○

唐津城は、寺沢志摩守広高により、慶長七年(1602)から慶長十三年(1608)に築城されたと伝えられています。その形は、唐津湾を臨む満島山を本丸とし、南西に広がる砂丘上に二の丸、三の丸を配置したもので、三の丸の周囲には城下町が造られました。満島山を中心に、虹の松原と西の浜一帯の松原が弧を描いて東西に広がっている姿から、舞鶴城とも呼ばれています。

寺沢広高は、唐津城築城に並行して、松浦川の改修・虹の松原の植林・新田開発を行い、現代に通じる近世唐津の基礎を造りました。また、天草の富岡城築城をはじめ、近年では唐津市厳木町にある獅子城も大改修を行っていたことが明らかになり、地域の拠点づくりにも尽力しました。このころ寺沢氏は12万3千石を領する外様大名へと成長していきました。

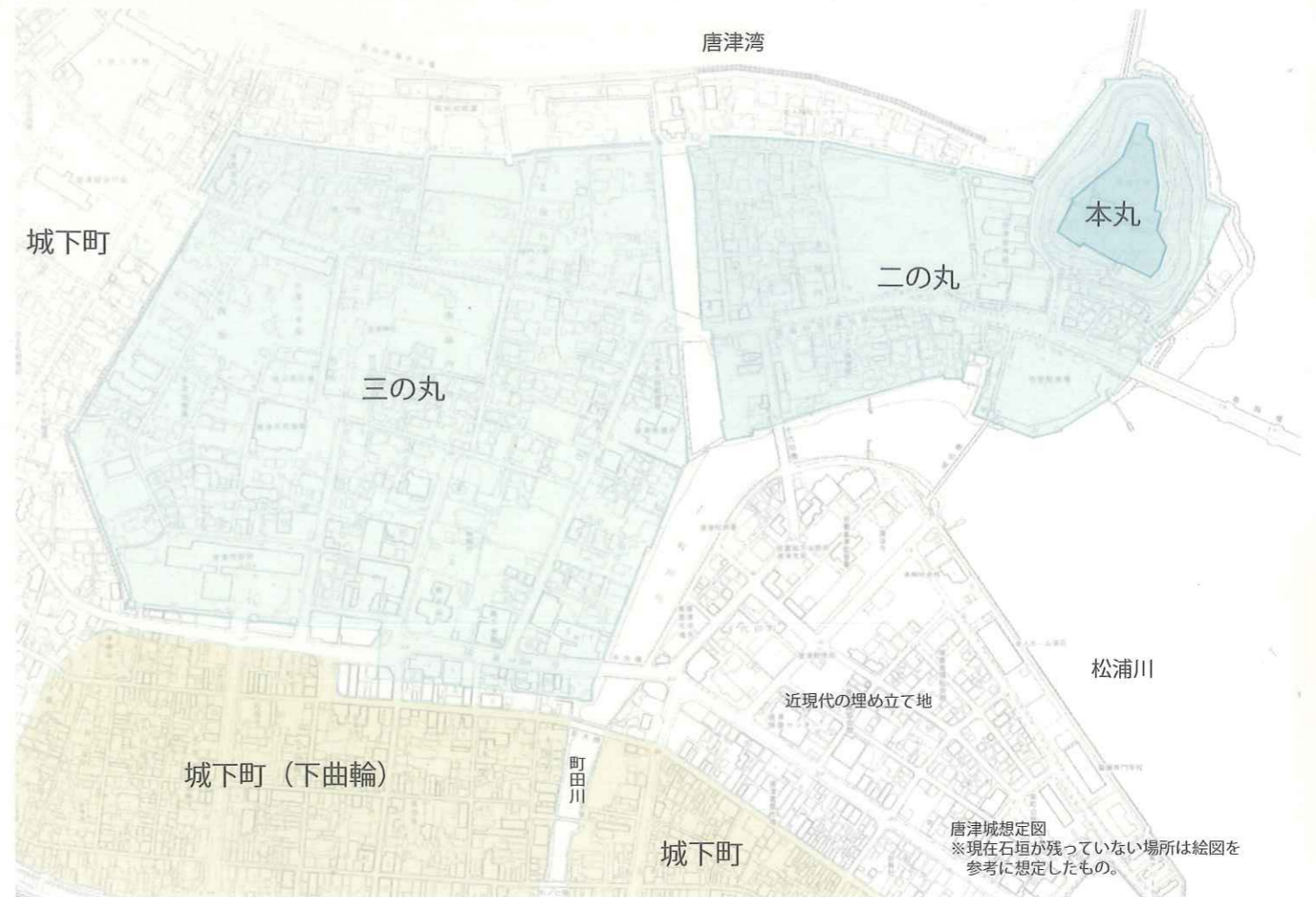
しかし、寛永十四年(1637)に起きた島原の乱の責任をとり、天草郡4万石が没収されました。さらに、嗣子がいなかった寺沢堅高が正保四年(1647)に自害すると、寺沢家は断絶、改易となり、一時唐津藩は天領となりました。

その後、譜代大名の大久保、松平、土井、水野、小笠原と五つもの家が転封を繰り返しています。唐津藩は、長崎警護を担当した佐賀藩と福岡藩の目付役として重要な任務があり、これらの外様大名を監視する譜代大名がこれにあたったようです。

その後明治維新を迎え、明治四年(1871)の廃藩置県により、唐津藩はその歴史に幕を閉じるのです。明治十年(1877)には舞鶴公園として整備、昭和四十一年(1966)に模擬天守が建設されて現在に至っています。

唐津城関連の主な出来事

- 1591(天正19年) 肥前名護屋城築城開始。
- 1592(文禄元年) 肥前名護屋城完成。文禄の役開戦。
- 1593(文禄2年) 文禄の役終戦。
- 1594(文禄3年) 波多三河守親、改易。
- 1595(文禄4年) 寺沢広高、唐津に入封。
- 1597(慶長2年) 慶長の役開戦。
- 1598(慶長3年) 豊臣秀吉死去、慶長の役終戦。
- 1600(慶長5年) 関ヶ原の戦い。
- 1602(慶長7年) 唐津城築城開始。
- 1603(慶長8年) 江戸幕府が開かれる。
- 1608(慶長13年) 唐津城完成。
- 1615(慶長20年) 大坂夏の陣。
- 1637(寛永14年) 島原の乱勃発。
- 1647(正保4年) 寺沢堅高自害。寺沢家断絶、改易。
- 1648(慶安元年) 一時天領となる。
- 1649(慶安2年) 大久保忠職、播磨明石藩より入封。
- 1678(延宝6年) 大久保忠朝、下総佐倉藩へ転封、松平乗久、下総佐倉藩より入封。
- 1691(元禄4年) 松平乗邑、志摩鳥羽藩へ転封、土井利益、志摩鳥羽藩より入封。
- 1762(宝暦12年) 土井利里、下総古河藩へ転封、水野忠任、三河岡崎藩より入封。
- 1771(明和8年) 虹の松原一揆。
- 1817(文化14年) 水野忠邦、遠江浜松藩へ転封、小笠原長昌、陸奥棚倉藩より入封。
- 1867(慶応3年) 大政奉還。
- 1869(明治2年) 版籍奉還。小笠原長国、藩知事となる。
- 1871(明治4年) 廃藩置県。小笠原長国、免官。幕藩体制の崩壊、唐津城廃城。
- 1873(明治6年) 廃城令。唐津城破却か。
- 1877(明治10年) 舞鶴公園として整備。
- 1966(昭和41年) 本丸天守台に模擬天守建設。
- 1989(平成元年) 三の丸(市役所前)の肥後堀整備。
- 1992(平成4年) 二の丸に時の太鼓建設。
- 1993(平成5年) 三の丸に辰巳櫓建設。
- 2008(平成20年) 唐津城石垣再築整備事業開始。



唐津城想定図 ※現在石垣が残っていない場所は絵図を参考に想定したもの。

## 9面石垣 (9面石垣裏)

### ○石垣の裏から古い石垣を発見

前回、6月に行った現地説明会以降、9面石垣（本丸南側の石垣）の解体工事を継続して行っています。その後7月中旬には、9面石垣の裏から古い石垣（旧石垣）が見つかりました。

旧石垣は3つの石材が確認できます。それぞれの石材の下にも、面を合わせた石垣石材の一部が見えることから、さらに下まで旧石垣が続いているようです。旧石垣は上部の石垣石材が無くなっており、9面石垣裏の栗石により覆われています。

新たに見つかった旧石垣は、9面石垣と様子が異なっています。9面石垣は矢穴を使って割った花崗岩を使用した乱積みで、石垣勾配が78°であるのに対し、旧石垣は花崗岩や玄武岩の自然石を用いた乱積みで、石垣勾配が51°と非常に緩やかな勾配になっています。また、9面石垣では、石垣石材の控え（奥行き）がとても長くなっていますが、自然石を用いた旧石垣は9面石垣に比べると短くなっています。9面石垣裏の栗石は、玄武岩丸石を用いており、10cm大の石材に加え、中には40～50cm大の大きな石材も多用しています。しかし、旧石垣の栗石には5cm以下の小礫を用いています。このような違いは時期差によるもので、旧石垣は9面石垣よりも古い様相を示しています。

石垣解体時の調査結果から、9面石垣が17世紀前葉（唐津藩初代寺沢氏の頃）に築かれたと考えられます。旧石垣が9面石垣が築かれる前に壊れてしまっていることから、旧石垣は9面石垣が築かれる前、唐津城初期段階に築かれたものと想定されます。



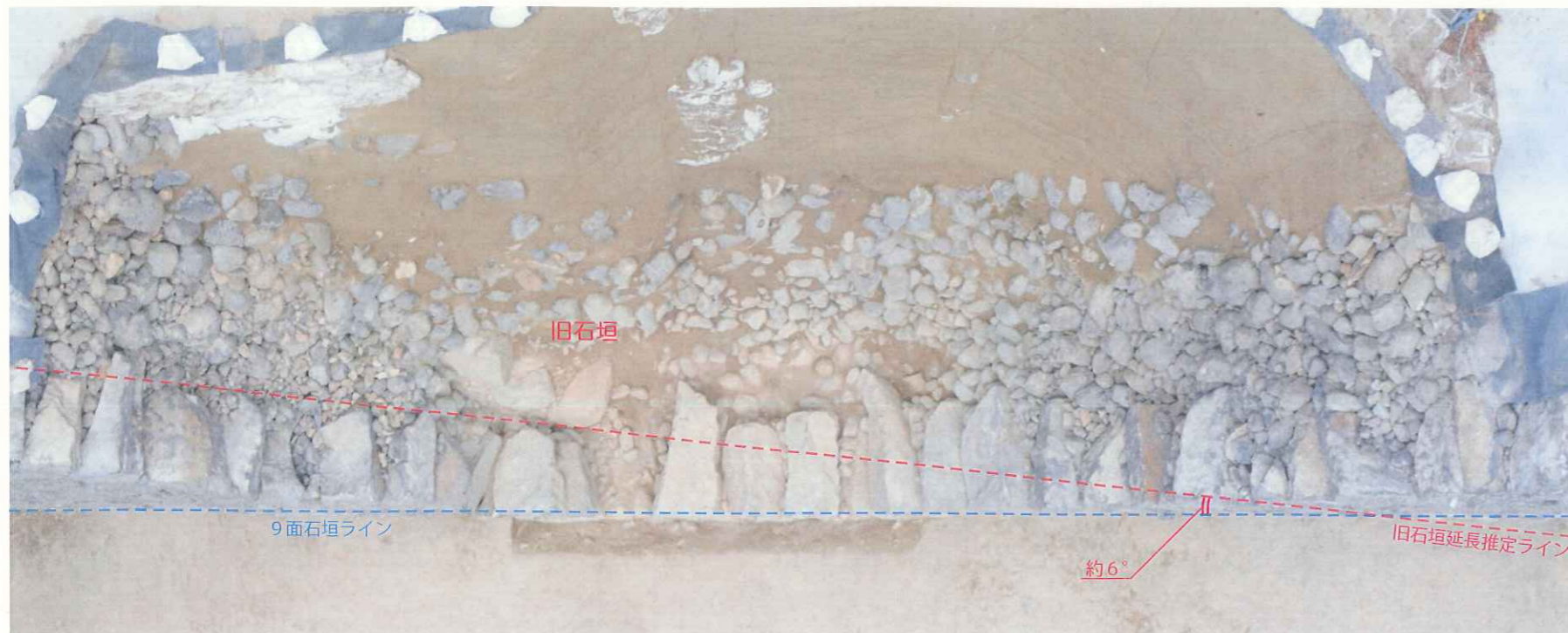
天守台と解体した9面石垣（南東から）



旧石垣検出状況（南東から）



9面石垣と旧石垣（左：南東から、右：東から）



9面石垣と旧石垣（南から）

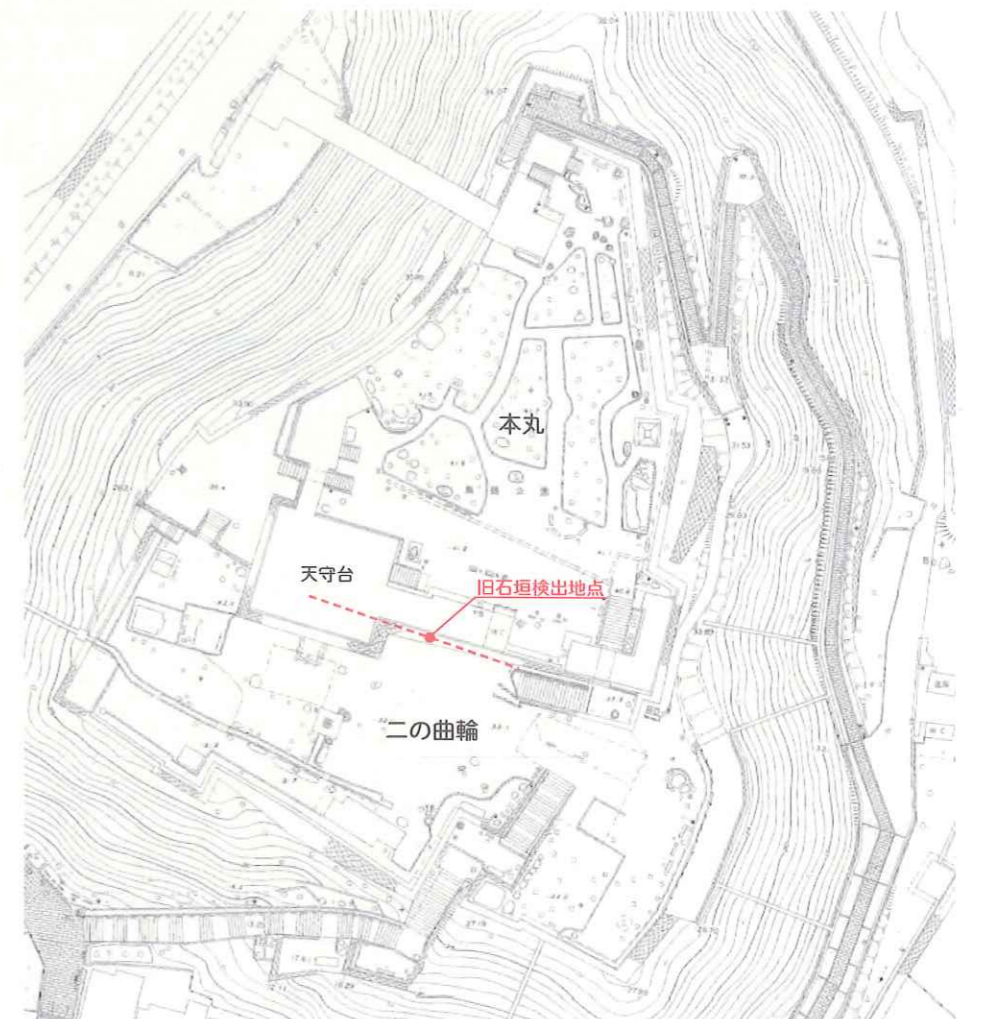
### ○本丸形状を改変

発見した旧石垣は9面石垣と平行ではなく、石垣軸が約6°ずれています。9面石垣を築く際に、微妙に軸を変えたようです。このため、二つの石垣が交差する範囲の旧石垣は残っていません。これは、9面石垣を築く際に影響のない範囲はそのまま残され、二つの石垣があたってしまう部分の石垣石材が取り外されたと考えられます。

まだ埋まっている旧石垣の西側には、旧石垣の延長部分がっていると想定されます。西側延長部分は天守台の下に向かって伸びており、天守台の下まで旧石垣が続いているようです。9面石垣と天守台石垣は、石垣の積み方や加工の度合い、石材の材質、石垣勾配が同じで、接合部となる入隅内部状況も前後関係が認められないことから、二つの石垣は同時期に築かれたと考えられます。

このような状況から、現在見られる天守台は、築城当初のものではないことが明らかになっただけでなく、天守台の下にはさらに古い石垣が存在している可能性が高いと考えられます。旧石垣の西側延長線上に古い天守台があるのか、または別の施設があるのか、現時点では明らかになっていません。今年度後半から予定している天守台石垣の解体調査により、その全容が明かされる可能性があり、今後の調査が期待されます。

これまでの調査では、1～3面石垣で、江戸時代を通して最低でも6回にわたる積み直しが行われていたことが明らかになりました。今回の調査では、古い石垣に被せるように新しい石垣を築き、9面石垣や天守台石垣の形状が大きく変わってしまう程の改変までも、江戸時代の初め頃に行われていたことが明らかになりました。今回の発見は、謎が多い唐津城築城の様子を知るための、重要な手掛かりと言えるでしょう。



9面石垣裏の旧石垣延長推定図